Ⅰ　研究の経過と概要
（本年度の支部教研の概要）

例：日本語教育分科会

小笠支部では、毎年、「わかる授業・楽しい学校をめざし、職場に自主研の輪を広げよう」のスローガンのもと、「小笠支部自主研夏季集会」を開催している。
今年度で第〇〇次を迎えた本夏季集会では、これまで、先輩教員から連綿とつながる確固たる実践を始め、若手教員による斬新かつ先進的な実践が数多く報告されている。
“自主研”の名の通り、組合員の自主性・主体性が尊重され、実践内容や報告形式も多岐・多彩に渡っている。管制研修にはない自由な雰囲気の研修は、小笠支部組合員の教育研究における独自性・独創性の素地を養うことにつながっている。

今年度、小笠支部日本語教育分科会では、分科会テーマを「生き生きと学び合う日本語教育をめざして」と設定し、小・中学校合わせて６本の実践リポートをもとに研究協議を行った。
小学校からは、「アクティブ・ラーニング」の視点から授業に「交流」を、「学びのＵＤ化」の視点から「視点化・焦点化」を、それぞれ取り入れることで、児童の学ぶ意欲や集中力を高めた実践が報告された。また、中学校からは、話し方・聞き方（訊き方）の具体的な手法も指導しながら「コミュニケーション活動」を取り入れ、「伝え合う力」の向上を図るための実践が報告された。

さらに、今年度も本分科会の特長とも言える「小グループでの自由討議」の時間を、会の後半に設定した。これは、少人数で自由に話し合うことを通して、参加組合員が自主性・主体性を発揮したり、経験豊富層と若年層が自由に交流したりできるようにと考え、ここ数年実施している。
普段、他校や異校種の教員同士が話し合う場が少ないことから、互いの実践紹介や情報交換ができるこのような場は、参加組合員から好評を得ている。

県教研への正会員選出にあたっては、実践報告された６本のうち、掛川市立〇〇中分会の〇〇□□教諭のリポートが、研究内容、報告文章ともに大変優れていると推進委員会で判断され、〇〇□□教諭を正会員として選出した。
その研究は、「書くことへの苦手意識」をもつ生徒が多い中、「書くこと」＝「発信」に対する抵抗感をなくすために、その前段階といえる「受信→思考」をスムーズに行わせることの重要性に着目し、実践に取り組んだものである。
「絵の読み解き活動」を通しての本研究実践は、多くの組合員の参考になるとともに、今後の教研活動の発展に寄与するものだと思われる。

例：外国語教育分科会

Ⅰ　研究の経過と概要

１　報告書ができるまで

（１）　はじめに

毎年開催される、小笠支部自主研夏季集会「外国語教育分科会」では、小学校で外国語活動を担任している教員や、中学校英語科教員が集まり、研修を積み重ねている。新学習指導要領の施行により、小学校３年生から外国語活動が始まることになったことから、小中連携がより一層重要視されている。本研修で小学校教員と中学校教員が話し合うことは非常に貴重な機会であり、日頃の悩みや実践を紹介し合う充実した場になった。

（２）　テーマ設定の理由

本年度の外国語教育分科会のテーマは「実践的コミュニケーション能力を高めるための工夫」である。英語は、母語の異なる人々の間をつなぐ国際的共通語として最も中心的な役割を果たしており、子どもたちが 21 世紀を生き抜くためには、英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠である。外国語活動が小学校において必修化された背景には、英語によるコミュニケーションを図ることができる日本人の育成が求められていることがあげられる。これからの英語教育では、実践的なコミュニケーション能力の育成がますます重要視されていくはずであり、小学校と中学校でどんな実践をしているかを知ることは必要不可欠である。そこで、本年度は小学校の先生と中学校の先生１人ずつの計２人にリポーターを務めていただき、テーマに基づいて協議を重ね、研究を進める事にした。

（３）　本年度夏季研修の様子

８月〇日（〇）、〇〇立□□小学校で自主研夏季集会が開催された。小学校のリポート発表では、聞き慣れ・言い慣れの充実のための様々なゲームの紹介やスモールステップの設定方法などの発表をしていただいた。また、中学校のリポート発表では、必要感のある場面設定の重要さや自信をもって表現させるための工夫、達成感・満足感を味わわせるための実践例の発表をしていただいた。参加者は、これからの授業実践に生かすことができる考えや教具のヒントを持ち帰ることができた。その後のグループワークでは、集まった参加者で日頃の実践の紹介や悩みなどを話し合うことができた。また、助言者として〇〇先生を招き、英語科におけるアクティブラーニングの考え方や、単元・学年・卒業後のゴールを意識する大切さなどのご講話をいただいた。

２　研究組織と報告書作成協力者

（１）推進委員

〇〇△△（菊川市立〇〇小学校）　　□□△△（御前崎市立〇〇小学校）

□□〇〇（掛川市立〇〇中学校）

（２）リポーター

〇〇△△（菊川市立〇〇小学校）　　□□△△（御前崎市立〇〇小学校）

□□〇〇（掛川市立〇〇中学校）

例：生活・総合分科会

Ⅰ　研究の経過と概要

1　報告書ができるまで

(1)　小笠支部研究活動の概要

小笠支部生活科・総合学習分科会では、「総合的な学習の時間」の活動の裾野を広げることを目的に活動をしている。生活科や総合的な学習の時間は、子どもたちの力を伸ばす大切な時間であり、魅力的な教科領域であることは周知されている。しかし、その反面、教材開発や単元構想の難しさもあり、苦手と感じる教員が多いのも事実である。

そのため、昨年度は、〇〇支部より〇〇先生を講師に招き、単元構想や教材開発について具体的な実践とともに講義をしていただいた。参加者は、〇〇先生の実践から改めて、生活科や総合的な学習の時間の魅力を感じるとともに、たくさんのヒントをいただき、自らの実践に生かしていこうと士気を高めた。

今年度は、昨年度の活動を受け、本分科会のテーマを「今、見直したい生活科・総合学習～新学習指導要領の観点から～」と設定し、生活科や総合的な学習の時間の学びや価値・可能性について研修を進めることとした。今後、様々な教育活動が盛り込まれていくことを見据えると、教員一人一人のカリキュラムマネジメント力の向上が不可欠である。このことから、今までの生活科や総合的な学習の時間の教育活動に新たな視点を提案していただける方を推進委員で検討し「国際理解教育」と「教材開発の実践」について、それぞれリポーターを依頼した。

(2)　自主研夏季集会の様子

８月〇日（〇）〇〇市立□□小学校で自主研夏季集会が行われた。

最初に、「日本人学校勤務の経験から考える国際理解教育」について発表していただいた。リポーターより、総合的な学習の時間のみならず、様々な教科領域において、「英語」をもっと柔軟に考え、受け入れていってはどうかという提案がなされた。

次に「『主体的に学ぶ子の育成』を目指した総合的な学習の時間の実践」について発表していただいた。児童の見取りと地域の教材研究に裏打ちされた「材」の決定や、子どもの思考に沿ったストーリー性のある単元構想づくりは圧巻で、よい刺激となった。

リポート発表の後は、参加者が低学年・中学年・高学年に分かれて分散会を行った。日頃の困り感へのアドバイスをベテラン教員から受け、今後の展望が開けた若手教員。教材開発についてリポーターより刺激を受け、それぞれの実践の情報交換する姿。そして「英語」とどのように向き合っていけばよいか困惑していた高学年の教員からは、もっと柔軟に考えて取り組んでこうとする前向きな声も聞こえた。

今後の教育活動のヒントになる発表や情報交換・意見交換は大いに盛り上がり、閉会の時刻を過ぎても尚、議論が続く様子が見られた。次につながる大変有意義な研修となった。

2　研究組織と報告書作成協力者

〇〇□□　（菊川市立〇〇小学校）　□□〇〇　（掛川市立〇〇小学校）

△△〇〇　（御前崎市立〇〇小学校）

例：保健分科会

Ⅰ　研究の経過と概要

１　報告書ができるまで

（1）　はじめに

毎年開催される小笠支部自主研夏季集会「保健分科会」は、地区内養護教員同士が日常執務の諸問題の解決や、健康教育の充実に向けて意見交換ができる貴重な場となっている。また、この分科会では、例年養護教員以外の教職員の参加もあり、多様な角度から意見交換がなされている。
本年度も地区全体で研究テーマを設定し、研究をすすめ、交流を深める有意義な機会となった。

（2）　テーマ設定の理由

子どもたちが生き生きと毎日の生活を送るためには、教職員のメンタルヘルスの安定が大切だと考える。しかし、実際の学校現場に目を向けると、常に子ども関わっている教職員は、ストレスを抱えている場合が多いと感じる。

今年度のテーマは、「教職員のメンタルヘルス　～養護教員のメンタルヘルス～」である。一昨年度
から、一般の教職員のメンタルヘルスを対象に研究してきた。臨床心理士などの専門家による講話や演習を通して知識を得、養護教員という立場からメンタル面で問題を抱える教職員に対してどのような支援ができるかを追求した。その中で、教職員を支えるためには、養護教員自身が心身共に健康でいなければならないという意見が多くあった。そこで、今年度のテーマを、「養護教員自身のメンタルヘルス」と設定し、研究することとした。

（3）　研究経過

①「教職員のメンタルヘルス　　～支え合う職場を作ろう～」（2015 年）

教職員のメンタルヘルスについての調査を実施し、知識に対する理解度を知り、課題を明確化した。また、集会当日は、実態調査の結果に基づいた臨床心理士の講話や事例検討を通して、有効な手立てを学んだ。

②「教職員のメンタルヘルスⅡ　～子どもたちに笑顔で接するために～」（2016 年）

養護教員から見た、メンタルヘルスの問題を抱えた教職員の実態を調査し、支援にむけての課題を明確化した。また、集会当日は、統括事務主幹による「メンタルヘルスに関わる福利・服務面について」の講話を聞いたり、臨床心理士より認知行動療法を学び、シートを用いた演習を行ったりして実践への理解を深めた。

③「教職員のメンタルヘルスⅢ　～養護教員のメンタルヘルス～」（2017 年）

・５月、６月　　調査の内容検討、実施
・７月　　調査結果の集計と考察
・８月４日　　小笠地区自主研夏季集会「保健分科会」開催
・８月中旬　　研究のまとめ

２　研究組織と報告書作成協力者

○○△△（菊川市立○○小学校）　　□□△△（御前崎市立○○小学校）
□□○○（掛川市立○○中学校）